

2012年度ピースセミナー

核兵器のない平和な世界の実現に向けて ～未来の子どもたちへ～

開催報告

2012年 12月10日(月)
10:30~12:30

講師 アーサー・ピナード氏
会場 東京都生協連会館 3階
参加人数 147人
主催 東京都生協連 平和活動担当者連絡会



司会 宮本陽子さん
コープとうきょう理事

◆ 当日の流れ ◆

- 10:40~10:45 あいさつ
- 10:45~12:30 詩人・アーサー・ピナード氏講演
- 12:30~12:50 質疑応答
- 12:55 閉会

講演や活動で全国を飛び回っていらっしゃる詩人のアーサー・ピナードさんをお迎えしての講演会。熱のこもったお話とユーモアあふれる言葉のおもしろさに時間は瞬く間にたち、当初予定していた参加者とのミニミニワークショップができず、質疑応答のみとなり閉会も遅れた。終了後、アーサー・ピナードさんの本の販売とサインも行い、長い列ができた。

『さがしています』(童心社) 『ここが家だ ベン・シャーンの第五福竜丸』(集英社) 『ひとのあかし』(清流出版) の3種類計45冊を完売。

閉会前に佐々木祐滋さん(折り鶴のサダコさんの甥)のCD『I NOR I』をBGMとして流した。

講演 アーサー・ピナード氏



「未来の子どもたちへ」、未来？

今日のタイトル「未来」という言葉は自分ではなかなか使えない。未来ってあるのだろうか？

今、謡をやっている。その所作、型、声、言葉にほれこんでいる。どうしてこんな型にはまったものなのかとも思う。しかしこの未来ということで考えたとき、謡曲がなぜこんなにがんじがらめなのかがみえてくる。様式美と言われるが、様式を作ろうとしてやったことではない。物語の中で、死んだ人やもう会えない人と会ったり、あり得ないことがおこる。あり得ないことが起こるとき、ある所作をもって表したりする。このことを未来につなげると、謡曲は過去と未来をつなぐものといえるのである。

以前ある政治家が唱えた「イノベーション25」という改革の言葉は多くの明るい未来を予測させた。が、夢物語のようなものでもあった。自動翻訳機などもあるが、それに私は仕事を奪われることはない。なぜならコンピューターは生き物ではなく、言葉は生き

ているものだから。

明るい未来をめざすならまず原発被害をなくすことである。このままではペテンの未来と闘いながらやっていけないといけない。皆さんが目指すことと、核のない世界などないと決めてかかっている政治家が目指すものは正反対。国と闘う覚悟がいる。

「わくわく」と「チャレンジ」!

3. 11以前、文科省と経産省が共同で作った、小学校に「わくわく原子カランド」、中学校に「チャレンジ原子カワールド」という副読本があった。この本によるとストロンチウムよりもCO2の方が怖いかに書かれている。そして決まり文句として「資源の少ない国日本」では原発が必要と言う。が、これこそ自虐的な見方である。資源が少ないと言い続けて国民をだましてきたのではないか。日本は地熱、水など資源やエネルギーはたくさんあり、それを使う技術も持っている。半世紀前からその資源と平和的技術を生かしてきていれば、



今日日本のエネルギーは地産地消になっていたはず。しかし、核開発の隠れ蓑としての原子力政策をとり、「原子力は安全である」ということを前提に学校教育の場でも教えられている。「核兵器のない平和な世界」を作ろうとしたら、まず文科省と闘わなくてはならない。

プルトニウム作り機＝原子炉

日本の核開発の心臓部は若狭湾にある高速増殖炉「もんじゅ」である。「もんじゅ」が作り出すプルトニウムは自然界になく、核分裂によって作り出されるもの、核開発そのものである。自然界にあってそれが半減していく過程で人類が生まれたウランとは違う。人類は放射性物質がなくなっていく過程で誕生したが、1942年アメリカでそれに逆戻りするプルトニウム開発が始まった。



原爆ではヒロシマが大きく取り上げられることが多く、生活者の物語としては大きな意味を持つが、最初で最後のウラン爆弾であったので核兵器作りをしてきた者にとってはヒロシマは無意味ものなのである。ナガサキに投下された原爆・プルトニウム爆弾こそ核開発の面では本流であり、パテンの要が見えるレンズとして大きな意味をもっている。

日本で「原子炉」と呼ばれるものはプルトニウム作り機であり、核分裂装置そのものである。日本人に受け入れられる「炉」という良いイメージの言葉を使い日本的に言い換えたPRの言葉である。この言葉一

つで日本人はだまされてきた。ヒロシマの生活者が作った「ピカ」や「ピカドン」は核爆弾の性能を言い当てているが、正式に使われることはない。

原子力の平和利用

第五福竜丸の事故と同じ時期、日本でも2億3500万円の予算（プルトニウム235にちなんで）をかけて原子力の平和利用という名のもとにプルトニウム開発が進められた。「もんじゅ」は核兵器の最高の原料ができる「炉」として成功している。核なき世界はプルトニウムづくりをやめないと実現しない。「もんじゅ」と六ヶ所村と大間原発、この3セットを止めて初めて核のない未来にちょっと近づく。核まみれ現在をどうするか。悠長に考えている場合ではない。「未来」はパテンの道具になっている。現在「平和」は核の平和利用という言葉に乗っ取られてしまった。不条理の世界を見抜き、本質を見極めることが必要。今は平和ボケしているのではなく、戦争ボケしているのである。原子炉が動いていることが戦争しているようなものなのだから。そこを見抜いて闘わなければならない。

ひとのあかし

未来を考えると足場となる詩人が福島南相馬の詩人若松丈太郎である。彼は震災前から今日を見通すような詩を書き、核の本質を見抜いてきた。本当のことを書いているからこそ決して教科書に載らない詩人である。最後に彼の詩

「ひとのあかし」を朗読して
終わりとする。



質疑応答より

Q. アメリカの選挙に対する思いは？

A. 生まれた時から2大政党制が確立していた。2人を一騎打ちさせ、派手な選挙戦を行うことで第3の勢力（市民の味方かも）が出てきても勝てないような仕組みになっている。他に候補がいらないわけではない。しかし他候補に入れることは死に票になると思い込んで結果的に死に票に投じてしまっているのである。死に票などと思わず、思う人に投票すべき。日本人も生活の現場で政治を作っていく必要がある。だまされていないで、目覚めて立ち上がらなくてはならない。みんなでイヤだと言えば変わる。

感想より抜粋（提出91枚）

- * 子どもたちの未来を考える上で、自分たちが考えなければいけない基本を知らされる機会となりました。裏にあるものも見抜く目を持ち続けたいと思います。未来を考えるなら今のことを考えた方が、という言葉にひかれました。
- * 核の平和利用はその言葉どおり良いものと思っていました。でも隠れ蓑であったのはあまりにもびっくりでした。小・中学生向けに原子力の利用肯定の本があり、私も目にしましたが危ないものとかわかっていても子どもたちには何も伝えていませんでした。真実を伝えていくことが大切です。勉強することから始めます。

- * 核の平和利用を学んだ、信じた私たちはまちがっていた。ことばは「心」つくられたことばではなく、人のこころを伝える本当のことばを人は伝えなければいけないと思いました。
- * 今まで見聞きしてきた「未来」「平和」ということばは何だったのかなと思いました。本質を知ることが大切だと感じました。今日のお話をきっかけに歴史、自分の生きている世界を知る努力をしていきたいと思います。
- * プルトニウム作りを止めなければ核のない世界は得られないということがわかりました。私達一人ひとりでは小さな力だと思いますが、生協のみなが一歩でも前へ出て、平和に向けての行動を進めていけたらと思いました。